実践研究

私の保育ノート

保育の可視化がもたらす保護者の変容 あらためて感じた、保護者と共に創っていく保育とは？

石井美和（幼稚園教諭）

私は、遊びを中心とした保育を行いながら大学院に通い、大学時代より関心の強かった保護者支援についての研究を行った。内容は、三歳児の保護者五名を対象に、遊びを中心とした保育の中で、保護者は〝遊びへの理解〟〝子どもへの理解〟において、一年間どのような気づきや葛藤を経験しているのか、心の変容を可視化したものである。

この研究を行った経緯として、まずは、保護者支援の一環として保護者に対し子どもの姿や遊びについて発信を多く行っていても、実際の子どもの姿を共有できているという実感をもつことが少なかったということ。次に、園からのいろいろな発信ツールはあるものの、子どもの姿や子どもが興味をもっていることなどの発信がどうしても事後報告になってしまっていたということである。そこで、よりリアルタイムに子どもの姿を発信し、保護者の〝遊びへの理解〟〝子どもへの理解〟を深めていくツールはないかと考え、新たに写真中心のドキュメンテーションを導入し、その記事の中に保護者のコメント欄を含め作成した。

石井美和（いしい みわ）
港北幼稚園（横浜市都筑区）教諭。6年目。
2016年4月玉川大学大学院入学。2018年3月卒業。

ドキュメンテーションによる保育の可視化

保護者へのインタビューを重ねていく中で、浮き彫りになっていったことは、「保育が見えにくい」ということであった。これまであらゆるツールを介して保護者に子どもの姿を伝えてきたつもりであったが、園でのわが子の姿を理解していくことは困難なことであることがわかった。保護者と共に子どもたちの姿を共有し、子どもの世界の面白さや成長を共有していきたいという思いで取り組んでいたが、実際の〝見えにくさ〟という壁は思っていた以上に大きいものであった。

しかし、ドキュメンテーション導入後より、保護者からさまざまな声が挙がってきた。「家でやり始めていたのはこの記事のことだったのですね」「最近、○○に興味が出てきたようです」「試行錯誤できる遊びって大切ですね」などと、記事とわが子の姿をリンクさせ、リアルタイムに子どもたちの興味関心に触れ、少しずつ保護者側にも気づきが生まれるようになっていった。

今まで月に一度、月末に発行していたお便りでは、説明するために文字が多くなっていたが、ドキュメンテーションは、写真がその場の雰囲気や状態を表しており、文字で説明する必要性が自然と減っていたことに気がついた。さらに、研究を通して、ドキュメンテーションのプラスの効果や影響力は、個々の保護者の子ども観にも影響を与え、遊びの中でのわが子の成長を実感する重要なツールであることも示唆された。

保護者と共に保育を創るきっかけ

現在、私は四歳児の担任をしているが、保育をしている中で、再びドキュメンテーショ

ンの影響力を感じることがあった。

五月頃から年中の子どもたちが絵の具や、色の混ざりに興味をもっていたことや、同じタイミングでおたまじゃくしを育てていたことから、子どもたちと相談して、こいのぼりならぬ「おたまのぼり」を製作する機会があった。以降、子どもたちの色への興味は継続的に広がりを見せ、絵の具だけではなく、自然物から取れる色を楽しむことや、身近な草花に触れる機会をつくっていった。

子どもたちにとっては、身近な草花としてツツジが人気で、実際にツツジの花で色水遊びも展開されていった。しかし、子どもたちと花を採りに行ったり、担任も集めて持ってきたりする分量では、数が足りず困っていた。そこで、ツツジ染めを行っている子どもの写真を中心に、「保護者に向けてツツジ大募集！」と表題を入れたドキュメンテーションを作成してみることにした。二、三日たってもあまり反応がなく、やはり難しいか、と感じていた頃、一週間ほどたち、ツツジをいっぱい詰め込んだ袋を握って登園する子どもたちが少しずつ現れた。さらには「逆に、白いツツジはどうなりますかね？」と白いツツジを持ってきてくださる保護者の姿もあった。

その頃、父母参観の行事が近づいており、保護者にこれまで子どもたちが楽しんできた草花染めを、子どもたちと同じ目線で、見たり体験したりしてもらえる機会にしていきたいと考え、素材の募集を行った。草花染めで使用している実際の草花や道具の種類、さらには染め終えた作品の写真など、何回かに分けてドキュメンテーションを作成し、随時、素材となる草花を募集していった。すると、次々と自宅にある生花が幼稚園に届くようになり、素材が豊かになっていった。保育参観当日は、白地のエコバッグやハンカチ、さらには家族おそろいのTシャツ、ワンピースな

ども持参して、親子で草花染めに夢中になる姿が見られた。

保護者と共に保育理解を深める

私は、日々の保育の中で、子どもたちと一緒に草花に目を向け、子どもの声を聞いていく中で、実際の保育の中で生まれる気づきや驚きを、楽しんできた。しかし、今回の保育参観までの過程や当日の様子から、このような活動は担任と子どもたちだけで創ってきたものではなく、そこに至るまでに、子どもの姿を理解し、実際に子どもとかかわってくださった保護者の方々の存在があったからこそだということに気づかされた。自然と保護者も一緒になりながら、いろいろな草花に目を向け、子どもたちのためにと保育で使える素材を持参し、参加していく様子があったことにとても驚いた。私はドキュメンテーションと出会い、少しずつ保育を開いてみたことで、こんなにも保護者の方々が、保育を創り上げていく一員として重要な存在であることをあらためて実感することとなった。

そもそも保育での発信の意図として、保護者から〝遊びへの理解〟〝子どもへの理解〟を得るためのものと考えていたが、発信は一方通行ではなく、保護者と保育者が共に情報を共有できているかがとても大きな鍵になると感じることとなった。共に子どもの育ちを大切にしていきたいというまなざしをもつことができれば自然と理解が深まっていくのではないかと考えた。今後も、保護者の方々と一緒に、保育の世界、子どもの世界を楽しんでいけるよう、ドキュメンテーションをはじめとした発信方法を模索していきたい。